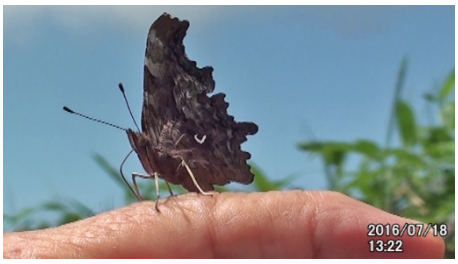
1962 年 8 月八ヶ岳の一角、切り立った広大な急斜面のスソ部分に広がる花畑は、高知市のチョウ以外に生きた姿をみたことのない筆者にとってまるで夢のような光景が展開していた。きれいなベニヒカゲが乱舞し、裏面に白い筋模様が入っていかにも高山チョウを思わすクモマベニヒカゲも混じる。タテハでは初めての観察となるシータテハが多く、花を訪ずれることは少ないはずのエルタテハもアザミ類の蜜を夢中で吸っている。クジャクチョウもいたはずなのになぜかこの場所で採集したという標本はなく記憶もうすい。右図はいずれも筆者にとっての初採集となる 2 種で採集地を中山峠としているが、正確には茅野側からの登りでクロユリ平を経て中山峠を越えた場所から、登山道をはずれて道なき樹林を横切って入り込んだ急斜面の草原で赤岳山麓が正しいかもしれない。下諏訪市の今は亡き津田進さんが案内して下さった、多くの人には知られていないチョウの宝庫だったようだが、その後、津田さんはチョウの世界から遠ざかっておられ、私も以降訪れたことはなく、ベニヒカゲなど多くのチョウが飛び遊ぶあのすばらしい環境が今でも残っていてほしいと思うばかりだ。エルタテハは前日の霧が峰和田峠から落合へと林道を下りる途中で、野鳥に捕獲されてしまう瞬間を目撃している。

再び信州のチョウを楽しめたのが 1968 年 8 月。美ヶ原山本小屋周辺の黄色い花が咲く一角にクジャクチョウとともに花蜜を吸うシータテハが多い。また、2004 年 8 月の開田高原月夜沢林道林道での撮影記録のように路面や岩壁の湿った部分で吸汁する光景もよく見る。シータテハは、これらのチョウとの出会いを目的としてどこかに出かけるということはなく、大好きなキベリタテハとの出会い目的で訪れる信州や山梨塩山市などで必ず出会えるチョウという印象だ。キタテハの項で触れているように、本種の学名は *Polygonia c-album* で、”C”という文字がみられることを反映した命名となっている。群馬県の小烏帽子岳へミヤマモンキチョウの観察に行った時の帰り道で、筆者の帽子などにまとわりつく愛らしい挙動を見せてくれたシータテハが、ついには指先の汗を吸ってくれた際の記録に、その”C”の文字がくっきりと目立ってみえる。



本種は北海道から九州まで広く分布しているが、近畿から中国地区、四国・九州では山地性の希少種となる。筆者は 1980 年頃、高知県物部村別府峡で採集しているが、長野県産で多くの標本作成をしていたこともあって三角紙のままで保管している。今では標本作成もやめてしまっており、貴重な四国産の記録標本である。

July 12, 2017　富良野布礼別川林道

台風の影響で発生した土石流で破壊された林道行き止まり点から川原に出てみると、倒木で翅を休めるシータテハや、交尾中のミヤマクワガタが 3 組もいて、このような光景はみたことない。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.

川べりのブッシュをかきわけて進めば、再び荒れた林道を奥へと行けそうだが、ヒグマの出没などこれ以上の単独行動には不安があり、惨めでやるせない気持ちのまま林道の湿り気がある部分にもどってチョウタイム。路面に湿り気がある部分は 3 か所でそれぞれが約 200m 離れていて、途中は日照りがきつい乾いた道を歩いて往復するわけだが、北海道なのに日中の気温が 30 度近くなっていて楽ではない。木陰に止めた車のそばで軽く昼食をとるあいだ、何に惹かれるのかシータテハが車のボディーにこだわるような飛翔を見せて静止する。湿り気があるとは思えない路面にストローをのばすシータテハも少なくない。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.